

指導計画及び指導案

函館市立えさん小学校

指導者：川前 昌市

1 単元名 タグラグビー（6時間扱い）

2 対象 5年生（24名）

男子：17名 女子：7名

3 単元の目標

- ルールを順守することの大切さを理解させ、楽しくタグラグビーを行う。また、仲間と協力し合いゲームを楽しく安全に気をつけさせる。（関心・意欲・態度）
- 基礎的なボールの扱いやボールを持たない時の動きを、チームとして課題を持ち取り組ませるとともに、効果的な攻撃及び守備について話し合い実践する。（思考・判断）
- ゲームは一人では成り立たないことを理解させ、仲間をどう生かし、自分は何をすべきなのかを瞬間的に考え行動することができるようにする。（技能）

4 児童の実態及び単元設定の理由

これまで、ボール運動は主にドッジボールに取り組み、全市の大会等にも参加し、優秀な成績を残し全道へコマを進めている。児童は、上級生のこれまでの成果を継承している。よって、ボールに触れる機会そのものは多く、同時にボール運動（投げる・ボールを繋げる）におけるルールと作戦の重要性については理解している。このことベースに、さらに運動量が多いボール運動としてタグラグビーを取り上げた。

また、本校校区には、函館市ラグビー協会の会長である工藤篤氏がおり、協力いただくことには了解を得ていた。もっとも工藤氏の存在がなければ、別の運動にすり替わっていたことも予想される。よって、本校は、氏の意を体するためにも、タグラグビーを全市レベルで取り組むための発信地としての責務を有しているとも考えている。

設定の意図としては、パスのルールを習得するための時間が多く取られることが予想されるが、学習の前半では、運動量よりもチームの仲間を意識させ、個々の能力を可能な限り発揮させることがタグラグビーを小学生に取り入れる大きな意味が有ると指導者は考える。機能的な個々の役割、状況に応じた個々の動きなどは、ゲームの中ではなかなか理解しがたい。しかも、チームとしての動きとはならず、初歩的なドッジボールの試合に見られる完全ポジション性となってしまうと、ゲーム中、上手（運動能力が有る）な子どもだけが活躍してしまい、設定の意図とはかけ離れたものとなる。これまでのボール運動の経験から、そのこと（上手な子どもを中心に進める）がタグラグビーにも当てはまるという潜在意識を払拭し、チームとしてどれだけ機能させることができるかを、個々の運動能力の差に固執しないゲーム作りが重要である。

一方で、運動量は体育の時間において切り離せないものである。児童数24名であることより、少人数でのゲームを行っても十分に運動量は確保できる。そのためにも、反則等でゲームを止めず、流れのあるゲーム作りを意識させる。